

【実践報告】

「学生のキャリアに対する関心を高める取り組み
～2025年度 BMS (Bunkyo Management System) 人間福祉学科
地域連携活動 実施報告～」

中嶋 一恵 Kazue Nakashima	清水 克之 Katuyuki Shimizu	山地 恭子 Kyoko Ymaji
太原 牧絵 Makie Tahara	河内 佑美 Yumi Kouchi	中村 卓治 Takuji Nakamura

キーワード：BMS(Bunkyo Management System)、学生、キャリア教育、異学年交流

本報告は、2025年度にBMSで取り組んだ「学生のキャリアに対する関心を高める取り組み」の実践報告である。今年度は、「仕事理解(6月)」「就職活動理解(11月)」「実践参加の促進(12月)」の3段階で異学年交流を取り入れたキャリア教育を実施した。その結果、報告者となった学生は、自らの経験を振り返り、整理し、他者に伝える過程を通して自己理解を深めることができたようである。一方、聞き手として参加した学生は、近い将来を現実的に捉え、今後の学生生活に対する意欲を高めたようである。

I. はじめに

広島文教大学人間科学部人間福祉学科では、これまでキャリア教育・就職支援の取り組みをBMS(Bunkyo Management System)のテーマとして位置づけ、継続的に実践と検証を重ねてきた(坂井ほか2021;河内ほか2022;棚田ほか2023;中嶋ほか2024)。前年度(2024年度)は、主に本学科卒業生による福祉職従事者による講話を中心に据え、「学生のキャリアに対する関心を高める」ことを目的とした取り組みを実施し、その教育効果をアンケート調査に基づき報告した。

こうした流れを受け、2025年度は、外部講師による講話型のキャリア支援を発展させ、学生相互の学びに焦点を当てた異学年交流型プログラムを実施した。大学におけるキャリア教育は、中央教育審議会答申(1999年;2011年)が示すように、単なる就職支援ではなく、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」として位置づけられるべきものである。とりわけ福祉専門職養成においては、知識・技能の修得にとどまらず、将来像の具体化や職業的アイデンティティの形成を促す教育的工夫が求められる。

中嶋、山地他：学生のキャリアに対する関心を高める取り組み
～2025年度 BMS（Bunkyo Management System）人間福祉学科地域連携活動 実施報告～

本年度は、こうした観点から、年次の異なる学生同士の相互作用を通じてキャリア意識の醸成を図ることを目的とし、年間3回のプログラムを実施した。第1回（6月）は「仕事について考える」をテーマにドキュメント番組を視聴し、その後、異学年混成によるグループワークを行った。第2回（11月）は「4年生による就職活動報告会」として、報告者である4年生を中心に1年生から3年生が車座形式で参加し、質疑応答を通して双方向的な交流を行った。第3回（12月）は「学生によるボランティア活動報告会」とし、3年生の発表を1・2年生が聴講した後、質疑応答を実施するなど、学年間の対話を重視した構成とした。いずれの回においても、参加学生に対してアンケート調査を実施し、教育的効果の検証を試みた。

福祉専門職養成教育においては、多様な価値観や立場の違いを踏まえた対話的学習が不可欠である。異学年による意見交換は、知識量や経験の差異を前提とした学習環境を形成し、学生が自らの現在地を相対化しながら将来を展望する契機を提供するものである。本取り組みは、外部講話に依拠した従来型のキャリア支援から一歩進み、学科内における学びの循環と継承を促す教育実践として位置づけられる。

本稿では、以上の趣旨に基づき実施した2025年度の異学年交流型キャリア教育の内容を整理するとともに、各回終了後に実施したアンケート調査の結果を分析し、その教育的効果と今後の課題について検討することを目的とする。

II. 今年度の活動内容

1. プログラム育心6月「仕事について考える（ドキュメント番組視聴）」

1) 活動内容

- ・日時：2025年6月11日
- ・対象学生：1～3年生
- ・参加者数：77名（1年52名・2年9名・3年16名）

前述した「学生のキャリアに対する関心を高める」ことを目的とした活動として、今回は、仕事理解、すなわちキャリアそのものについて考える活動を行った。

プログラムとしては、メディアを視聴しそれに関してグループワークを行う流れである。活用したメディアは、転職して社会福祉業界社会福祉士として働く主人公に密着したドキュメント番組（30分）で、番組の主人公が働く介護施設は、認知症高齢者を地域住民の理解と協力を得ながら地域で支える取り組みを行っており、社会福祉士の業務や地域福祉のあり方について学ぶことができる内容となっている。番組視聴後、「主人公が仕事に求めること」をテーマに、1グループ5～6人でグループワークを行った。可能な限り異学年でのグループ編成を行ったが、1年生の参加率が高かったため1年生のみでの編成となったグループもあった。学年混在のグループでは、1、2年生は少々緊張気味であったが、3年生がファシリテーターとしてリードしている様子もみられた。グループで話し合ったことを発表してもらったところ、「人を支えるということはその人の尊厳を守ることだと知った」「地域とのつながりを強め、町

中嶋、山地他：学生のキャリアに対する関心を高める取り組み

～2025年度 BMS（Bunkyo Management System）人間福祉学科地域連携活動 実施報告～

全体が応援できる環境を作ることが大切だと思った」など、社会福祉士の仕事が個別支援を基盤としながらも、同時にメゾレベルに活動の広がりを持っていることを実感できたという発言が多く聞かれた。プログラムの最後に二次元コードによるアンケートを実施し、全員から回答を得た。

2) アンケート調査方法と結果

①アンケートの調査方法

アンケート項目は、BMS 担当である筆者らが議論を重ねて質問項目を作成した。アンケートフォームは Microsoft Forms を使用し、調査用二次元コードを作成、オンライン上での回答とした。参加学生には、回答は自由意思であること、得られたデータは数値化し個人が特定できないように処理をすること、適切に管理を行い個人情報を保護すること、以上の内容を依頼文および口頭にて説明したうえで、アンケートの回答をもって同意が得られたこととした。アンケートの回答者数は 77 名であった。

②アンケートの結果

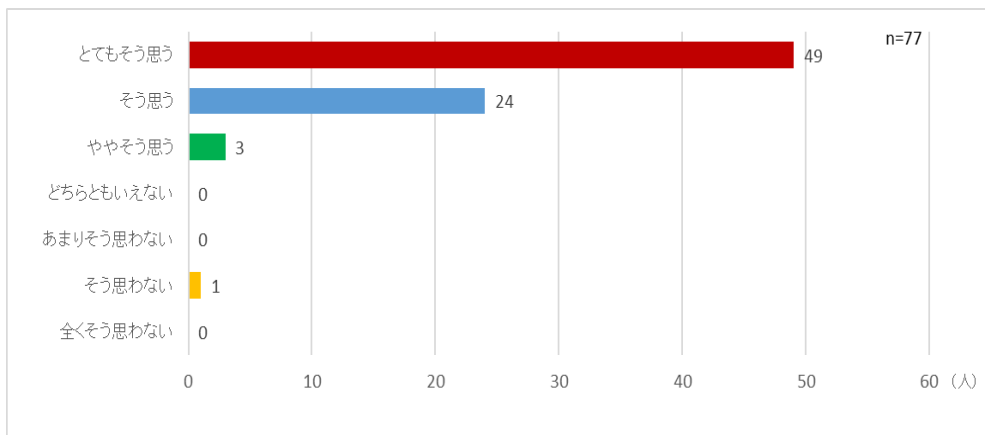
今活動で使用した映像の有用度を問う質問を「0：全くそう思わない」～「6：とてもそう思う」の 7 件法で尋ねたところ、約 95% の学生が「とてもそう思う」「そう思う」と肯定的にとらえている（図 1）。また、活動内容の有用度をより具体的に理解するため、「大学での学修」「学外実習」「就職活動」「人生・生き方」「キャリア形成」の 5 項目で質問を行ったところ、全体的に肯定的な回答を得たが、中でも「学外実習」「人生・生き方」の項目において「とてもそう思う」「そう思う」と回答している割合が高かった（図 2）。

この映像から学んだ社会福祉士の役割について自由記述で回答してもらったところ、「地域とつながりをもち生活を支えること」「専門職としての知識だけでなく、地域での関わりや利用者との関係(人生歴や生活歴)も支援の中でどれほど重要なかを学ぶことができた」などの、人や地域をつなぐ地域福祉について理解したものや、「その人の尊厳を守ることを考えながら、それを実践、挑戦していくことが社会福祉士の役割でもあると学びました」「最期までその人らしさや生き方を第一に考える事が重要」など、個人の尊厳や意思を尊重するという、福祉専門職の姿勢について記述したものが多くみられた。以上から、大学での学修で得る知識・技術と福祉現場の専門職の業務が学生の中で結びついて理解されたことが推測される。

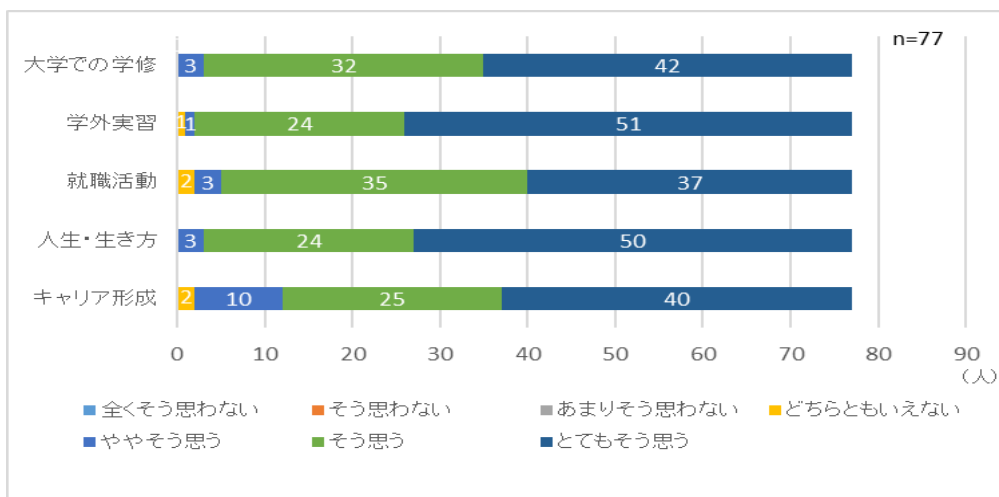
また、映像を視聴した後のグループワークに対する参加学生の印象を、学年別に集計した（図 3）。どの学年も概ね肯定的に受け止めているようであったが、特に 1 年生に「とてもそう思う」という回答が多いのが特徴的であった。映像視聴後の他者との感想の共有や意見交換の機会が、大学生活によりやく慣れてきた 1 年生にとって新鮮であったことが推察される。

さらに、映像視聴やグループワーク後に記入した「自分が仕事に求めること」についての記述では、「本人の意思を尊重し、笑顔が増えるための選択をして行動すること」「人との関わりや信頼と質の高いサービスの提供」「会話（意思疎通）の大切さ」「人と関わる上での自分なりの考え方や知識を深めること」「社

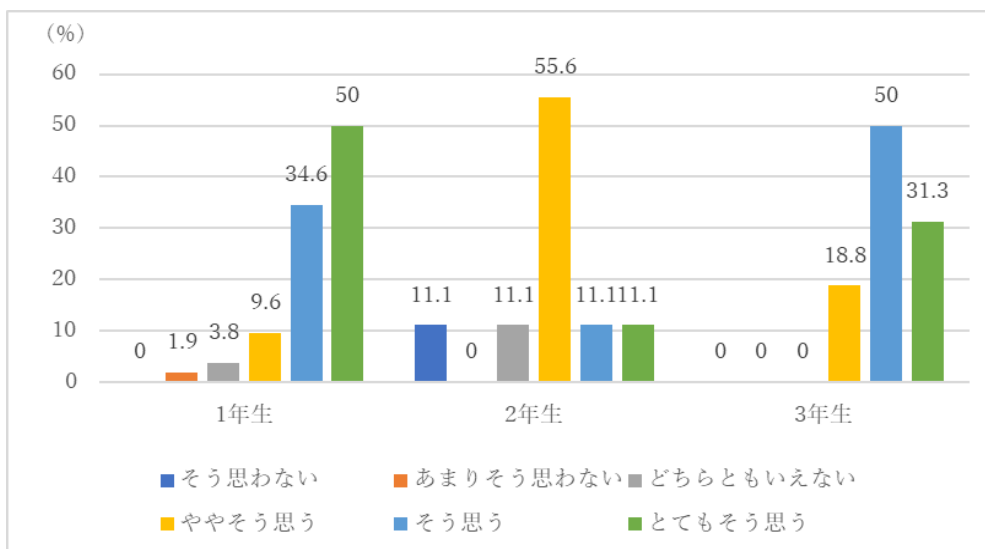
会における福祉がどんなことが必要なのか考えて話し続ける姿勢」といった、人を尊重することや人とのつながり、専門職としての知識や技術の向上などの回答がみられた。これらは、主人公や職員たちの福祉専門職としての姿勢や葛藤などから、学生たちが今後の自らのキャリアや生き方について刺激を受けた結果であるとも思われ、BMSの目的である「学生のキャリアに対する関心を高めること」につながったのではないかと見える。



(図1) 今回の映像の内容はためになりましたか。



(図2) それぞれの事柄に対して、映像の内容が役に立つと思いますか。



(図3) グループワークはためになりましたか。(学年別)

2. プログラム育心 11 月「4 年生による就職活動報告会」

1) 活動内容

- ・日時：2025 年 11 月 26 日
- ・対象学生：1～3 年生 4 年生は報告者として参加
- ・参加者数：80 名（1 年 47 名・2 年 3 名・3 年 30 名）・4 年生 21 名

今回は、学生にとってキャリアの入り口となる就職活動を取りあげた。

例年実施してきた、就職先が内定している 4 年生がこれから就職活動を始める 3 年生に就職活動の体験を伝える取り組みを、今年度は参加者を 1～3 年生に拡大して行った。本学科の学生が主に就職している職種を 7 分野（①公務員、②障害福祉分野、③児童福祉分野、④高齢者福祉分野、⑤医療福祉分野、⑥地域福祉分野、⑦一般企業）あげ、特に希望者が多い、または職種の分類が必要だと思われる 3 分野（高齢者福祉分野、医療福祉分野、一般企業）はそれぞれ 2 つに分けて全体で 10 ブースを構成し、そこにその分野に内定が決まった 4 年生を配置して、参加学生が関心のある分野に分かれて就職活動体験を聞くという実施形式で行った。その際、参加学生が複数の分野の体験を開けるよう、1 分野で話を聞く時間を 15 分に設定し、それを 2 回行って、複数の分野の報告を開けるように配慮した。

活動の事前準備として、参加学生には希望分野をあげてもらい、どのブースにも学生がいるように教員が調整を行うとともに、報告をする 4 年生に対する質問を受けて、時間の制約の中で効率よく参加学生の就職活動への悩みや心配などを解消できるように工夫した。

当日の各分野への参加者数は、2回合わせて①公務員 10名、②障害福祉分野 14名、③児童福祉分野 28名、④高齢者福祉分野 31名、⑤医療福祉分野 34名、⑥地域福祉分野 23名、⑦一般企業 20名であった。

2) アンケート調査方法と結果

①アンケートの調査方法

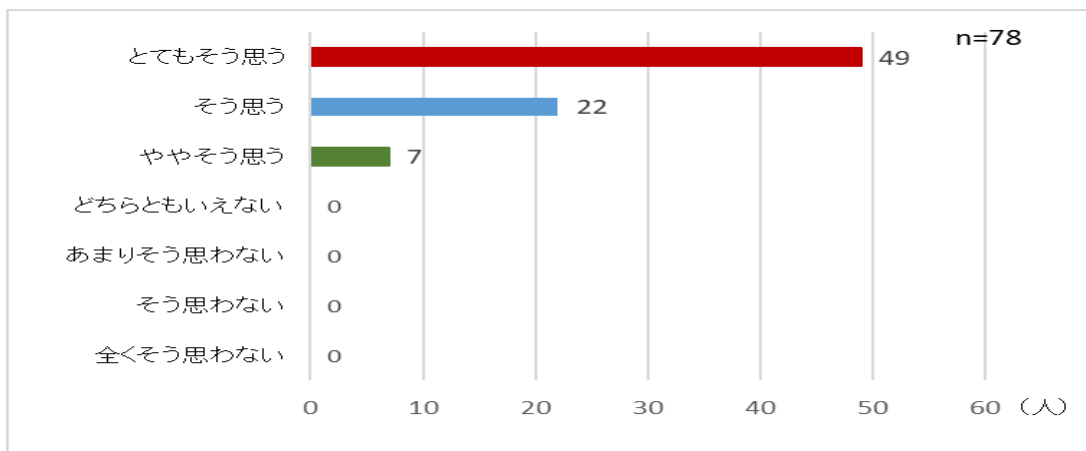
アンケート項目は、BMS 担当である筆者らが議論を重ねて質問項目を作成した。アンケートフォームは Microsoft Forms を使用し、調査用二次元コードを作成、オンライン上での回答とした。参加学生には、回答は自由意思であること、得られたデータは数値化し個人が特定できないように処理をすること、適切に管理を行い個人情報保護をすること、以上の内容を依頼文および口頭にて説明したうえで、アンケートの回答をもって同意が得られたこととした。アンケートの回答者数は 78 名であった。

②アンケートの結果

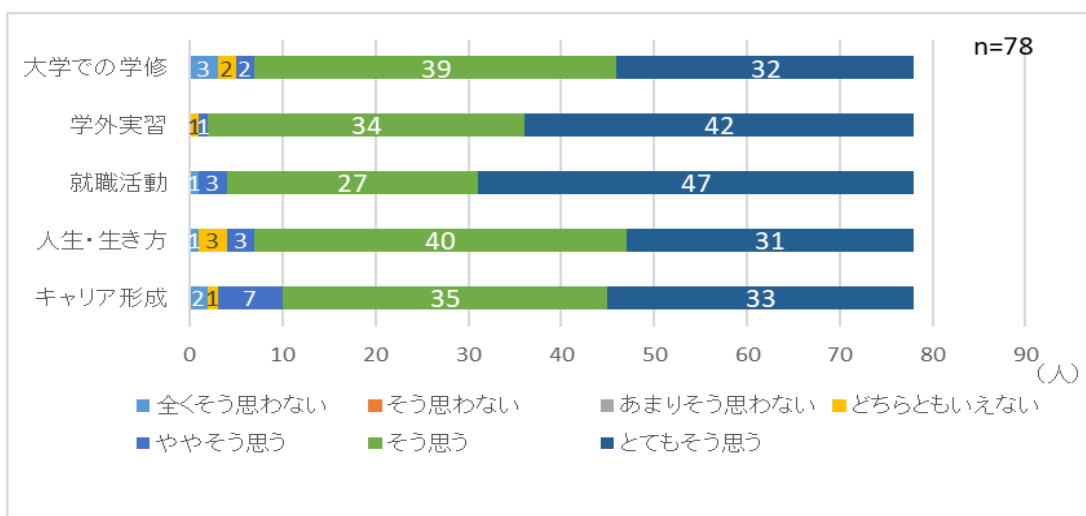
就職活動報告会の有用度を問う質問を「0：全くそう思わない」～「6：とてもそう思う」の 7 件法で尋ねたところ、約 90% の学生が「とてもそう思う」「そう思う」と肯定的にとらえている (図 4)。また、活動内容の有用度をより具体的に理解するため、「大学での学修」「学外実習」「就職活動」「人生・生き方」「キャリア形成」の 5 項目で質問を行ったところ、全体的に肯定的な回答を得たが、中でも「学外実習」「就職活動」の項目において「とてもそう思う」「そう思う」と回答している割合が高かった (図 5)。

このうち、参加者は 1 年生と 3 年生が中心であったため、この 2 学年で有用度を比較すると、1 年生は「学外実習」で、3 年生は「就職活動」で「とてもそう思う」と回答した割合が高い傾向がみられた (図 6)。これらは学生たちにとって、これから学生生活の中で経験する重大事項であり関心も高いことから、この結果は当然のことといえる。また、1 年生の回答のうち、「就職活動」も「とてもそう思う」が多かったことは、1 年生にとってこの報告会はまだ関心がないのではないかと心配した教員の懸念を払拭するものであった。

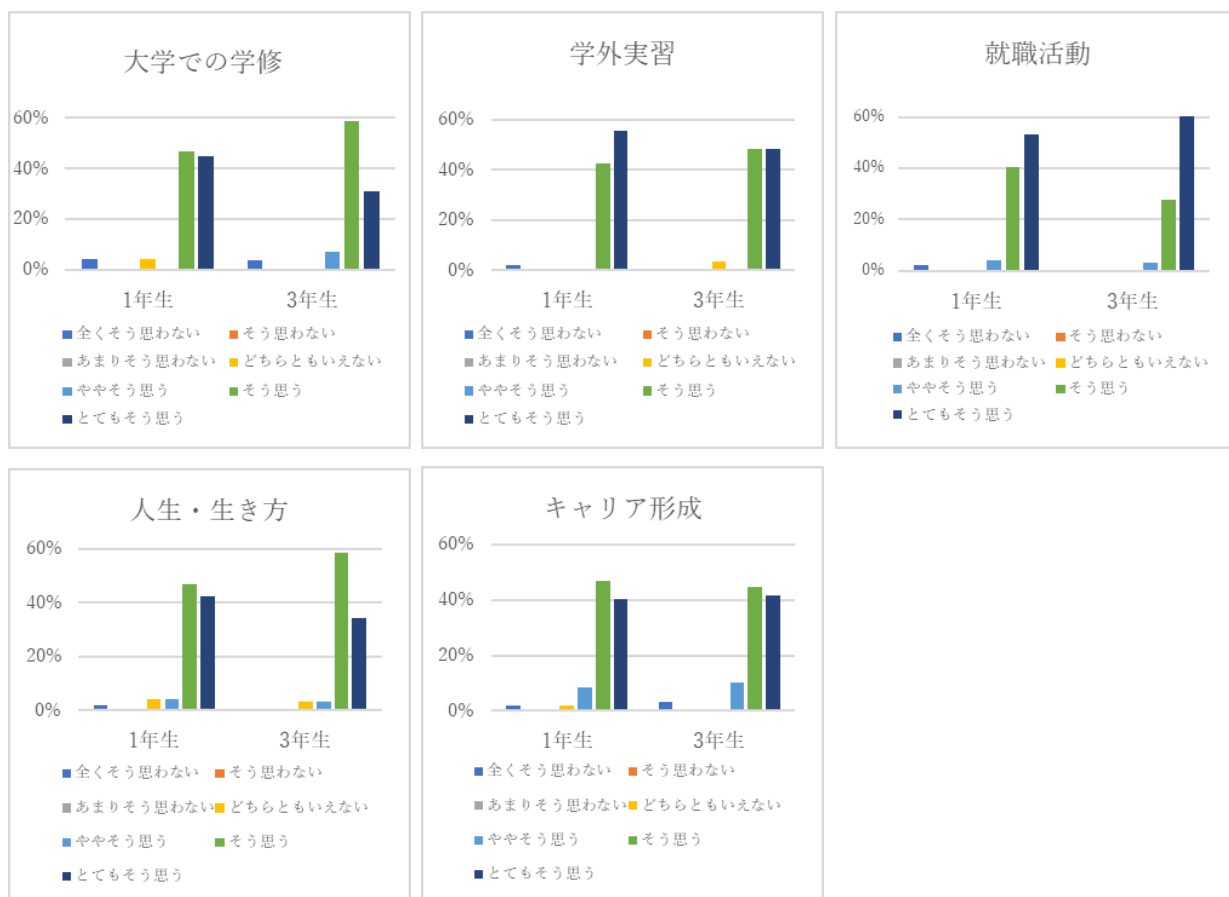
また、就職活動報告会で学んだことについて記述してもらったところ、「どのように就活したらよいかわかった」「早めにインターンや気になった企業を調べておくことが大切だと思った」などの就職活動の方法について学んだことの記述が多く見られた一方、「自分のやりたいことや興味のあるものを一番に決め手にしたほうがいい」「実習で自分に適性があるか見極める必要があること」といった就職先の選択に関すること、「先輩のリアルな声が聞けてよかった」「自分より先に進んでいる人の言葉を聞くと、今学んでいることに対するやる気が少し増えました」といった、先輩の体験から意欲をかきたてられたことなどの意見もみられた。特に、就職活動を終えたばかりの 4 年生が話す成功体験や失敗、助言などは、下級生にとって近い将来の自分の姿をリアルにイメージすることにもつながり、就職活動のノウハウを伝えるだけではない説得力があるものといえる。このように、早期から自分の将来を考える機会があることは、その後の学生生活をいかに送るかにつながってくるものと思えるため、可能な限りこうした機会を作っていきたいと考える。



(図4) 就職活動報告会の内容はためになりましたか。



(図5) それぞれの事柄に対して、就職活動報告会の内容が役に立つと思いますか〈全体〉



(図6) それぞれの事柄に対して、就職活動報告会の内容が役に立つと思いますか〈学年比較〉

3. プログラム育心12月「学生によるボランティア活動報告会」

1) 活動内容

- ・日時：2025年12月10日
- ・対象学生：1～3年生
- ・参加者数：75名（1年43名・2年16名・3年16名）

ボランティア活動に参加することは、様々な福祉現場や仕事、職種を知ることや、その経験から自分の興味や適性を考えることでキャリアを意識する機会につながる。そのため、今回はボランティア活動への参加を促進することを目的とした活動を行った。

本学科は、以前から学生にボランティア活動を勧めているが、特に2024年度からは、学科教員および学生が閲覧できるボランティア募集案内フォルダをチームス上に作成し、いつでもボランティア情報を得ることができるようにしたほか、ソーシャルワーク演習の科目において、1年次に少なくとも2分野以上のボランティア参加を課題として課すことで、ボランティア活動参加の促進を図っている。

中嶋、山地他：学生のキャリアに対する関心を高める取り組み
～2025年度 BMS（Bunkyo Management System）人間福祉学科地域連携活動 実施報告～

今回のプログラムでは、1年次から継続的に多領域のボランティアに参加している3年生1名に、参加したボランティア活動の内容や印象に残っていること、ボランティア参加による自分の変化や成長などについて語ってもらった。当学生は、授業や実習を通して身につけたプレゼンテーション技術を活用し、写真を取り入れた視覚的にわかりやすいスライドを作り、参加者にクイズを出したり、質問を促したりするなどの工夫を凝らした報告を行った。

この報告の後には、他の学生たちが自身関わっているボランティアへの参加を呼びかけたり、ボランティア活動に関するアンケートへの協力を依頼するなど、学生たちがプログラムをリードする回となった。

2) アンケート調査方法と結果

①アンケートの調査方法

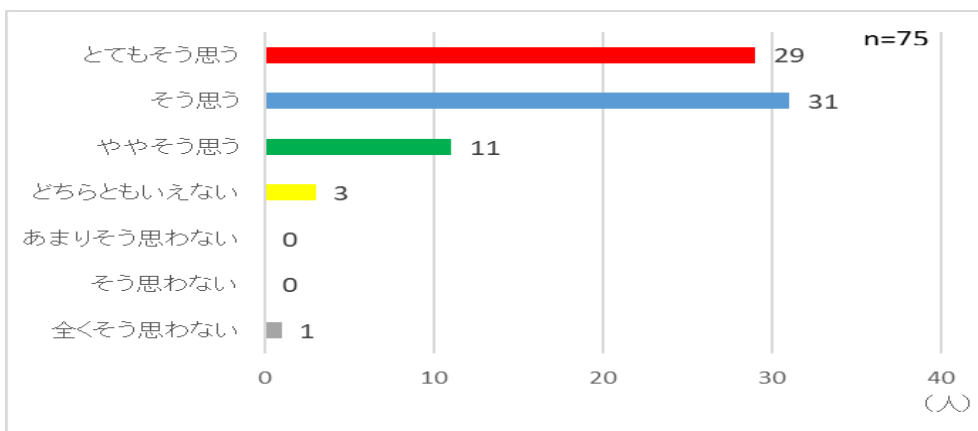
アンケート項目は、BMS 担当である筆者らが議論を重ねて質問項目を作成した。アンケートフォームは Microsoft Forms を使用し、調査用二次元コードを作成、オンライン上での回答とした。参加学生には、回答は自由意思であること、得られたデータは数値化し個人が特定できないように処理をすること、適切に管理を行い個人情報を保護すること、以上の内容を依頼文および口頭にて説明したうえで、アンケートの回答をもって同意が得られたこととした。アンケートの回答者数は75名であった。

②アンケートの結果

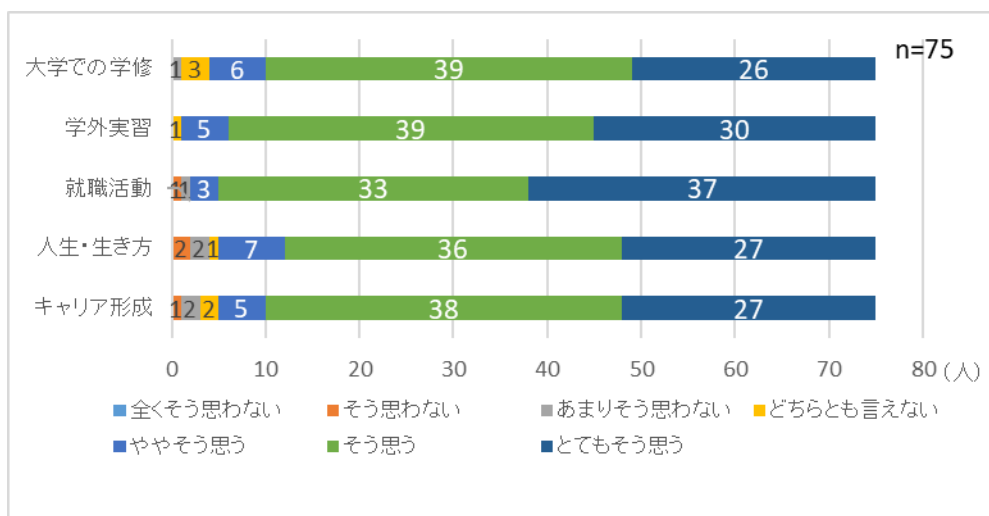
ボランティア活動報告会の有用度を問う質問を「0：全くそう思わない」～「6：とてもそう思う」の7件法で尋ねたところ、約80%の学生が「とてもそう思う」「そう思う」と肯定的にとらえている（図7）。また、活動内容の有用度をより具体的に理解するため、「大学での学修」「学外実習」「就職活動」「人生・生き方」「キャリア形成」の5項目で質問を行ったところ、全体的に肯定的な回答を得たが、中でも「就職活動」の項目において「とてもそう思う」と回答している割合が高かった（図8）。これは、報告者がボランティア活動への参加のメリットとして、職場を直接知ることができることや自分の適性、興味関心ができることだけでなく、活動歴を履歴書に記載できることや面接時に自分の経験を語ることができる、など就職活動への有用性について話した結果であると思われる。実際、この報告会で学んだことを自由記述してもらった回答の中にも「自分の人生経験として、就職などに役に立つことが分かりました」「就活の際有利になる」といったものが散見された。こうした学生にとっては、これまでボランティアと就職とのつながりを意識することがなかったものと思われ、新たな視点をもつことにつながったのではないかと推察できる。

また、学年で回答を比較すると、3年生が「学外実習」の項目で「とてもそう思う」と回答した割合が高かった（図9）。3年生は、ソーシャルワーク実習や介護実習、保育実習など、学外実習を経験する学年であるため、ボランティアで体験した人との関わり方や福祉現場の雰囲気が、学外実習時に役に立ったことを想起させた結果なのかもしれない。

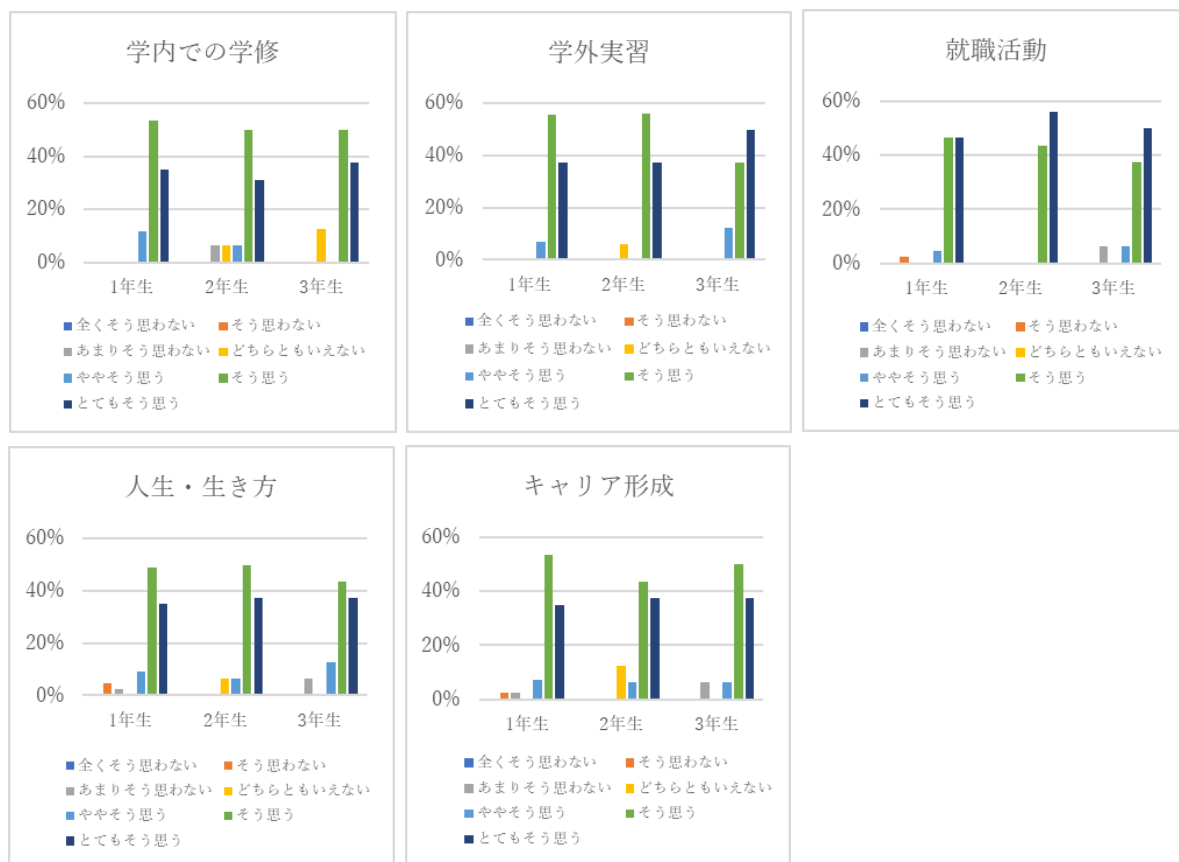
そのほか、自由記述からは、「ボランティアに参加しようと思った」「気になっただけでも少しのきっかけでもいいから、自分のためになりそうなボランティアは進んでやるべきだと思った」など、ボランティア参加に対する意欲が高まったものや、ボランティアに参加することで、「人との交流や新たな発見、企画力などにつながる」「自分の社会で生きるための力をつけることができると感じた」「新たな視点や発見が得られ、今後の活動に活かせると思った」などのボランティアに参加する意義に気づいた記述がみられた。



(図7) ボランティア報告会の内容はためになりましたか



(図8) それぞれの事柄に対して、ボランティア報告会の内容が役に立つと思いますか (全体)



(図9) 以下の事柄に対して、ボランティア報告会の内容が役に立つと思いますか (学年比較)

Ⅲ. 今年度の活動に対する考察と課題

今年度は、「仕事理解 (6月)」「就職活動理解 (11月)」「実践参加の促進 (12月)」の3段階で異学年交流を取り入れたキャリア教育を実施した。いずれの回もアンケート結果は概ね肯定的であり、学生にとって有意義な機会となったことが確認できた。

6月のプログラム育心「仕事について考える (ドキュメント番組視聴)」では、ドキュメント番組視聴とグループワークを通して社会福祉士の役割や尊厳を守る支援のあり方について理解が深まり、「学外実習」「人生・生き方」に役立つとの評価が高かった。11月のプログラム育心「4年生による就職活動報告会」では、「就職活動」「学外実習」に対する有用度が高く、4年生の具体的な体験談が下級生の将来像の具体化につながった。12月のプログラム育心「学生によるボランティア活動報告会」では、ボランティア経験が実習や就職活動に結びつくことへの気づきが見られ、参加意欲の向上がうかがえた。

本年度の特徴は、上級生が発表者となり、下級生と対話する形式を重視した点にある。発表者は、自らの経験を振り返り、整理し、他者に伝える過程を通して自己理解を深める。これは専門職養成におい

中嶋、山地他：学生のキャリアに対する関心を高める取り組み
～2025年度 BMS（Bunkyo Management System）人間福祉学科地域連携活動 実施報告～

て重要な振り返りによる実践を促す機会となる。さらに、年次の近い学生同士の交流は、将来を現実的に捉える契機となり、学科内で経験を共有する雰囲気づくりにも寄与したと考えられる。

また、昨年度は参加学年は自由ではあるもののメインターゲットを2年生（途中までは4年生も）とし、様々なゲストスピーカーの講話を展開したが、今年度は育心を学科内で実施し、参加対象を全学科的とした点も特徴としてあげられる。さらには話題提供は上級生を中心に学生たちが担い、当事者たちが育心プログラムの中心を担った点が参加満足度にも寄与しているものといえる。職業・就職・ボランティア（自己実践）は当学科においては学生たちに必須の取組であるだけに、すでにそうした体験を終えた先輩たちから提供される話題に後輩たちが当事者性を持って臨めた点は、昨年度の社会で活躍する先輩や実践家の方々の内容とは距離感や実感も異なり、経年的な観点からも良い流れであったのではないだろうか。

一方で、いくつかの課題も明らかとなった。第一に、学年構成の偏りである。第1回および第2回では1年生の参加割合が高く、2年生の参加が相対的に少なかった。異学年交流の効果を高めるためには、学年間のバランスをより意識した参加促進策が必要である。第二に、発表者育成の仕組みである。今回の報告は、発表者個人の力量に依拠する部分も大きかった。今後は、発表者向けの事前オリエンテーションや振り返りの機会を設けることで、より教育効果を高めることが期待される。

また、キャリアへの関心を高めるためには、昨年まで行ってきたような卒業生や福祉従事者らとの交流も効果的である。実際、学生からは「現場の声を生で聞きたい」という要望も出ている。こうした声にも耳を傾け、いかにキャリア教育を行っていくか検討を続けたい。

参考文献

- ・中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」2011年1月
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf
- ・坂井晶子・太原牧絵・河内佑美「人間福祉学科における就職支援に対する満足度向上のための方策とその実施・検証についての報告」広島文教大学『人間福祉研究第19号』2021年、pp.33-43
- ・河内佑美・太原牧絵・坂井晶子「人間福祉学科におけるキャリア教育の実践と評価について」広島文教大学『人間福祉研究第21号』2023年、pp.20-26
- ・棚田裕二・河内佑美・山地恭子・中嶋一恵「学生のキャリアに対する関心を早期に高める ―2023年度 BMS(Bunkyo Management System)実施報告―」広島文教大学『人間福祉研究第22号』2024年、pp.12-23
- ・中嶋一恵・山地恭子・中村卓治・太原牧絵・河内佑美・山田あかり「学生のキャリアに対する関心を高める取り組み～2024年度 BMS（Bunkyo Management System）人間福祉学科地域連携活動 実施報告～」広島文教大学『人間福祉研究第23号』2025年、pp.18-25